『高橋是清、生涯学び続けた実践の人』

米欧回覧実記を読む会・歴史部会
平成二十四年十月二十二日　報告者　井上　泰

大正から昭和にかけ財政家・政治家として活躍した高橋是清から現代人が学ぶべきことは非常に多い。その方面に関しては、碩学の研究家によって数多くの良書が執筆されている。

では、その高橋自身を育てた教育と環境はどのようなものだったのであろうか。どのような育ち方をして、実際、どのような学び方をしたのだろうか。また高橋本人は、学習や教育というものが本来どうあるべきであると考えていたのか。これらの視点は、現代の教育の在り方を考えるにあたっても、たいへん興味深いテーマであろう。

今回の歴史部会での講演では、身内に伝わる人間是清に関する「心象」を頼りに、六つの具体的なエピソードを選び、高橋を育てた江戸時代の教育にはどのような特徴と秘密があったかを探ってみた。

はじめに

『高橋是清、生涯学び続けた実践の人』は、いろいろと思案した末に辿り着いた題名であった。人間誰しも生まれたとき頭の中は空っぽである。それが成長するにつれ様々な経験をして、勉強をして、自分から世の中に働きかけてみて、その結果や結末を甘いとか苦いとか味わいながら、次第に知識が身についていく。他の人が積み重ねて到達した結論を聞いたり本を読んだりすることからも学ぶ。そうした知識がまたその人の人格を形成していく。ピッツバーグ大学のリチャード・スメサースト氏は、「高橋是清には正式な学校教育を受けた形跡がない」と指摘している。それでは教育とは何なのであろうか。また学習とはどういうプロセスなのであろうか。

高橋是清は正規の学校教育を受けなかったが、それは勉強や学習をしなかったと言うことではない。私が知る限り死ぬまで勉強し続けた人であった。この知識を獲得する、それも単に知識のための知識ではなく実践に役立つ知識、責任ある行動の元となる知識を獲得するとはどういうことなのか。「学習」そして、それを助ける「教育」というテーマを掘り下げるのに、高橋是清は、格好の材料を提供しているのではないか。そういうことで、主として『教育論』として話をまとめてみた。

高橋是清の成長過程を記述した文章は豊富に存在する。それらによると、高橋は生まれながら強運の持ち主で、身辺に多くの善意の人達に恵まれる。頭は良いし、性格は明るく、常に前向きで、誰にでも好かれる。そして身体も人並み以上に大きく、大変健康に恵まれていた。実父、実母から引き継いだ遺伝子が、相当に優れていたと言ってよいであろう。しかし、私たちは、この高橋是清の先天的な部分にいくら着目しても、あまり得るものはない。なぜならこの部分は努力しても変えようがないからである。

それに対して、後天的な部分、つまり、出生後の教育や学習の在り方、そして何よりも、高橋是清の並ならぬ「自己研鑽」と、物事の本質を知

ろうとする「知識欲」については、後世の我々にも大いに参考になるのではないか。何に突き動かされて、それが出来たのか。あの時代、何がどのように今の時代と違っていたのか。高橋是清はどのようにして、生涯、時代の最先端を行く知識とビジョンと胆力を維持し、そして、それらを研鑽し続け、大きな仕事につなげていったのか。私たちはこの点に着目すべきであろう。

高橋是清の生涯とその思想について共通の認識を持っていただくには、(現時点では)リチャード・J・スメサースト著、「高橋是清、日本のケインズ ― その生涯と思想 ― 東洋経済新報社」が最も内容が充実している。日銀の鎮目雅人氏による訳文もこなれており、是非一読をお勧めしたい。本の表題、そして帯の「たぐいまれなる国際人・高橋是清はどのようにして生まれたのか」は、まさに高橋是清の「人間形成」― making of the man ― を示唆するタイトルとなっている。その冒頭から少し引用してみよう。

本書が扱う第一の領域は、高橋の教育についてである。不運な出生や困窮した幼年時代を経た高橋は、どのようにして洗練された政治、経済思想を持つに至ったのか？ 高橋は、その生まれた年代と低い身分のために、本質的に独学の人であり、古典的な武士の教育も、近代的なエリート教育も受けていなかった。高橋が持っていた唯一の役に立つ技能は流暢な英語能力であり、彼はこれを横浜の宣教師のもとで10歳のときから習いはじめたのであった。実際、高橋は、1850年代に身分の低い武士として生まれ、英語を上手に話す能力を身につけた数少ない人物の一人であった。（中略）横浜でクララ・ヘボンに学び、カリフォルニア州オークランドで下男として働いた後、高橋は、まだ10代や20代初めという若い時期に、明治政府にとって最も重要なお雇い外国人たちの何人か、たとえば、スコットランド人の銀行家アレクサンダー・アラン・シャンド、オランダ系アメリカ人の宣教師ゲイド・フルベッキ、アメリカ人の教育家デービッド・モーレーなどと、親交があったのである。

スメサースト氏はさらに一歩踏み込んで、正規の古典的な教育を一切受けなかったことが却って良かった、という言葉で締めくくっている。

この研究を通じて筆者が発見したことは、高橋は学校に通うことによってではなく、貪るように書物を読み、人と話すことによって自らを教育したということ、そして日本語と英語の両方で読み、話していたということである。高橋は、若いときには満足に学校にも行けなかったにもかかわらず、生涯最後の25年間に政府の要職を占めるまでの間に、高い教養を身につけ、さらに、正規教育につきものの視野狭窄にも陥らないものの見方ができる人物になっていたのである（not limited by the strictures of a formal education）。

さらに2008年6月の国際文化会館での講演で、スメサースト氏は、「高橋は既存の教育らしい教育を受けていない。英語力という技能をもとにキャリアを築き、生涯をひとり[経験主義者]として過ごした」と、もう一歩この問題に踏み込んでいる。

以上は、スメサースト氏による分析だが、私は、この「高橋の教育」に関する指摘に大変新鮮な衝撃をおぼえた。何故なら、この「正規教育につきものの視野狭窄・・・云々」という指摘は言い換えると「日本では、正規の『学校教育』と『勉強・学習の成果』というものの間に正の相関関係がないのではないか」との疑問符とも取れるからである。

スメサースト氏の指摘は、半ばそうだと思う反面、私の家に伝わる話や、私の理解するところと何処か違う。否、それだけではない。問題は、どうしてそういうことが可能だったのか、と言う点。またそれは高橋是清固有のケースなのか。それともその時代の志ある人たちには、案外一般的なことだったのか。更につけ加えれば、明治維新を成し遂げた優れた人たちは果たしてどうだったのか。大久保利通や伊藤博文や陸奥宗光は、どのように勉強して歴史的な大きな仕事に結びつけたのだろうか。高橋是清の学習プロセスを見ることで、ひょっとしたら何かが見えてくるかも知れない。

高橋是清が、何を、何時、何処で、どのように、学んだか、そしてそれは何故必要だったのか、という分析を網羅的にすることはできないが、私なりに、彼はこういうことを大切だと思い、それをこういう場面で、こんな仕方で学んだ、という例というかエピソードを思いつくままに幾つか列挙することは出来る。そこから「学ぶ」ということは、どういうことなのか。そして本人はどのようにそれを実現・達成したのか、結論づけてみたいと思う。さらに、余り指摘する人はいないが、高橋には教育者としての顔があった。そこで、教育者・高橋は、どう考えていたのかを紹介したい。また、そういう彼を育てた江戸時代の人材育成の特徴はどうであったのかを見たい。翻ってこの分析が、昨今の日本における学校教育の欠陥が何なのか、そういった生々しい問題をあぶり出すツール、或いはそれらを映す鏡のようなものになれば幸いである。

高橋は、何をどう学んだか、六つのエピソード

先ず主な参考文献について紹介したい。スメサースト氏の著書については既に見た通りであるが、最も重要な情報源は、高橋本人の言葉であろう。まだ生存中に出版されたものとして、自伝の「是清翁一代記」がある。そして、亡くなる直前まで本人が直接関わって出版の準備を進めていたものとして「随想録」がある。「一代記」と「随想録」については、高橋是清が、秘書官の上塚司氏に過去の膨大な資料を渡して整理してもらい、それを基に過去を思い起こしながら口述筆記させ、それを上塚氏が持ち帰って清書し、またそれを推敲する、ということを幾度となく経てできあがった、とある。（上塚司関連文書は国会図書館憲政資料室に寄贈され保存されている。）

次に、今日の話で多く引用するのは五男高橋利一の遺した文章からである。是清自身が父親の立場からともすれば甘やかされがちな末子・利一の教育になにが必要か、日頃から厳しく指導していたからあろう、彼の文章には多くのヒントが隠されている。その主なものを挙げると、

- My Father Takahashi, CURRENT HISTORY, New York, 1936.5
- 「父・是清の思い出」　東洋経済新報　昭和27年2月23日
- 「父是清を語る」人物往来　昭和27年3月、4月号

カレント・ヒストリーはニューヨーク・タイムズの月刊誌である。昭和十一年五月、当時三井物産ニューヨーク支店に勤務していた利一は二・二六事件直後に求めに応じて英文で寄稿した。不幸にして文中に当時の日本の軍国主義に批判的ととられる部分があり、発刊後まもなく輸入禁止処分の措置を受けた。アメリカでは JAP. GOVT BANS CURRENT

HISTORY と報じられて却って人気が出、75万部売り尽くしたとか。この文章は最近スメサースト氏から入手するまで、親族の間でも知られていなかった。

その他には、最後の秘書官・久保文蔵氏による寄稿文、

- 「蔵相高橋是清翁」財政　昭和28年1月号、

そして、高橋是清自身がその中で文部省廃止論を説いた、

- 「内外国策私見」大正9年9月稿　松方正義関係文書　十五巻

教育者としての高橋是清の重要性を指摘した片岡英氏の

- 「赤と白・小説高橋是清」

などが、主な参考文献となる。

私自身は、父母から祖父について様々な話しを聞いて育った。日々の会話をあまり意識することなく聞き流していたため、細かいところまでの正確な記憶とは言えないが、しかし、祖父・高橋是清に関する「心象」は、リアルかつ相当に重みのあるものがある。

ここに挙げる六つのエピソードは、昨今の若者の間において、あるいは世の中一般的にあまり話題にならない話ばかりと思われるかも知れないが、これから一緒に一つずつ見ていくことにしたい。それらは、①生死について、②幸運について、③学問や学習について、④契約と交渉について、⑤自活することについて、そして、⑥宗教について、である。

一、生死について

高橋是清は生まれて4日目に里子に出されたため、生母には一度3才の時に偶然に対面はしているものの、記憶はない。是清が8才の時に生母は亡くなっている。自伝の冒頭にその悲しい事実を知る経緯が綴られている。また、勉強のためにお寺に預けられていた時の話として、彼の心の奥底に終生基調としてあった死生観が「随想録」に載っている。生母の死から始まり、常に彼の身近にあった「死」についてたいへん感動的な文章なので、以下に引用したい。

自分は十歳の時、寺（現東五反田の寿昌寺で伊達政宗夫人が堂塔を寄進してこの地に移したもの）に奉公に行ったものである。その寺には飯焚きがおったが、葬式があると、その男は死人を埋めるために、穴を掘った。すると、その穴からよく骨が出て来たものだ。その骨を野犬などが来て、荒しては悪いから、私は提灯を提げて穴掘りの番をしたものである。

そうした事が日々あるので、私は死人をあたかも自分の友達であり、かつ尊むべきもののように感ずるに至った。それで昼間、暇でもあると、無縁の墓などを見回って、苔を落としてやったり、雑草を取って掃除をしたり、あるいはまた樹から花を切って墓へ供えたりして、独り心に楽しんだものであった。そうして、陽が落ちて暗くなった夜中に、葬式が来ると、あたかも兄弟が、親しい友達でも迎えるような温かい愉快な気分をもって対したのであった。

現代人は、生と死をまったく別物と考え、日々の生活ではあたかも死は存在しないような生き方をしている。ここが随分と違うように思う。

もう一つの事例は、いざ米国に留学するということになって、養祖母の喜代に、短刀を渡されて、これで名誉を失うようなことがあったら腹を切れ、ということで切腹の手ほどきを受ける場面である。今一代記からその箇所を引用する。

船出の日もだんだんと押しせまって来たある日のこと、祖母は私を膝近く呼んで一振りの短刀を授けて言うには、「これは祖母が心からの餞別です。これは決して人を害（そこ）ねるためのものではありません。男は名を惜しむことが第一だ。義のためや、恥を掻いたら、死なねばならぬことがあるかも知れぬ、その万一のために授けるのです」といって、懇（ねんごろ）に切腹の方法まで教えてくれた。

この話しについて末息子の利一は現代風により分かりやすく話している。

父は、毎夜就寝前必ず彼女（養祖母）の写真の前で頭を下げていた。父は私に、人生の成功も名声も健康もすべては彼女のお陰である、と一度語ったことがある。彼女の名は高橋キヨ（喜代子）といったが、父に、「先ず、物事は良い方に考えること、何も恐れないこと、何も心配しないこと、そして神様は、崇高な目標を達成しようと努力する者を、必ずや助けるものであると確信すること」を教えた。

特に、決して死を恐れないことを教えた。「死を怖がらなければ、その分、生きることを楽しめる。心配することも減る」と彼女は言った。

父は、後に仕事において、常に結果を恐れず、信ずるところを述べたし、またこれが、政治家にまず求められるべき資質であると考えた。

さて、こうした死生観、つまり世の中には「命より大切なものがある」という考えは、現代人に最も縁遠い考えになってしまったのではないだろうか。

二、幸運について

高橋是清は、自伝でも随想録でも、また家族にも、「自分は本当に幸運であると思っていた」と話している。

私は幼少の頃から、幸にして一種の信念を養成することができた。それは私が四歳か五歳の頃 ― 人の言うたことが、ようやく頭に入って記憶せらるる年頃の話であるが、皆から『この子は仕合わせ者だ仕合わせ者だ』といわれたものである。そのわけは、身分が低いのに、偶然貴人に近寄ったとか、あるいは馬に蹴られても、幸に怪我をしなかったというようなことを指していったのであるが、とにかく、そうした仕合わせ者だ仕合わせ者だと皆からいい囃されたことが、幼少の頭の裡（うち）に深く刻み込まれて、自分は仕合わせ者であると思って、常に楽天的気分に満たされ、よし蹉跌しても、失敗しても、そんな焦心苦慮せずに済むようになったのも、こうした事が一つの動機となっておるように想われる。

また息子の利一はこの点について次のように語っている。

父は私に幾度となくこう言った。「いかなる場合にも、悲観的になるのは不健康だし、馬鹿らしいことだ。なぜなら将来に心配するものは何もない。また過去はどうしようもない。もし問題に遭遇したら、自らの才覚と勇気に頼るしかない。」

高橋是清の幼年期と最期をみると必ずしもそう幸運だったとは言えないように思うが、この楽観主義を、例え根拠のない「刷り込み」でも、幼少の頃に植え付けられたことは、重要である。

三、学問や学習について

では、高橋是清はどのような勉強をしたのだろうか。幼少の頃を記述したものに、そしてこれは私も母からも聞かされた話しとして、次のようなものがある。利一氏の文章から見てみよう。

祖母（キヨ）は、父に朝の空気が澄んで新鮮なうちに早起きをして、日の出や気持ちの良い夜明けを味わうことを教えた。彼女は、歴史上の偉人達は皆早起きであったと、言った。

父は、夜中に起きて、寺まで一里強の道のりを歩いて通った、と私に語った。（愛宕下の仙台屋敷から大崎の寿昌寺までの４キロ半）私は父に、何故そんなに早く学校にいったのか、と訊ねたことがあった。「自分はいつも授業で一番になりたかったからだよ」と言った。

習い事が難しいと、父はよく泣いた。そうすると、和尚さんは、父に優しく言葉をかけて慰めた。しかし、これは父を怒らせた。武士の子が情けをかけられるなどということはあってはならないと感じたのである。ある時和尚さんが父を慰めるつもりでミカンを渡したところ、父は跳び上がって和尚さんの鼻に噛み付いた（私の家のバージョンでは、ミカンを和尚さんに投げつけた）。

十一歳の時、祖母は和喜次（是清の幼少の頃の名）を大崎猿町の寿昌院に預け、寺子屋教育を受けさせた。喜代は可愛い孫のことが念頭から離れず、しばしば和尚を訪問し様子を聞いては安心して帰るのが常であったが、彼女は孫が自分の顔を見ると里心がつき依頼心を起こし、修業が修業にならぬと思う心遣いから、朝は3時に寺に赴き和尚と話し、４時の弟子たちの起床時刻前に寺を辞したという。

江戸時代は、このように小さな子供が早朝から４キロ半の道を通って読み書きソロバンの基礎を身につけるのは、ごく一般的なことだったのだろう。自然に体力もついただろうし、また相当の気合いの入れ方である。

その後、仙台藩の方でも若い者に洋学を身につけさせて将来に備えようということになり、高橋は、横浜に英語の勉強に出される。そこでヘボン夫人やバラー夫人の教えを受けるという話は自伝にもあるが、次の利一の一文は驚きである。

当時の日本には英語の辞書がほとんどなかったが、太田英次郎という英語の師匠が稀少な一冊を所有していた。そこで、父は毎晩のように彼の家を訪ね、辞書を読んだ。そして三ヶ月も経たないうちに、丸ごと写本してしまった。

スメサースト氏の本を読む限り、高橋是清は英語と洋学だけの人であるような印象を受けるが、決してそうではない。短期間であっても、寿昌寺では四書の素読をやっているし、また唐津で英語学校の教師を請け負った時（本人17･8才）、自分に漢文の素養が足らないことを反省して、城内にいた中沢健作という碩学に時々助けてもらいながら、玉篇（辞書）を片手に頼山陽の「日本外史」 ― 全二十二巻を三ヶ月で読破、その後「国史略」を読んだ、とある。大変面白い箇所なので、自伝からその部分を引用してみたい。

耐恒寮が城内に移った後は、唐津藩の先輩で学校係の少参事であった中沢健作という人が、「あなたは年若で英学が堪能であろうが、まだ漢学をなさらないから惜しいことである。この際漢学をやってはどうです、失礼ながら私が御教授申そう」（中略）「まず『日本外史』からお始めになったらよかろう」ということであった。

それから早速『日本外史』を調えてさて教わる段になると、子供の時分四書の素読を教わったようにして教えてもらうことも面白くな

いから、中沢さんに、まず三度ばかり読んでもらってその後で私がそれを読むことにした。一週間ばかりやって見たが、日に三枚ずつ進んだものを後で読んで見ると、先に読めたものまで忘れていｚる。耐恒寮の生徒の中には、漢学をやったものが多い。自分が中沢さんに外史を習って、三度も読んで覚えないでは、生徒に軽蔑されるという考えが起った。（中略）中沢さんについて教わることをやめて、（中略）夜酒を飲んだ後、自分で『玉篇』を引張って毎晩三時間くらいずつ外史を勉強した。始めの三冊までは実に苦しんだが、その後は大変に楽になって、三月ばかりの間字引と首引して独学で一通りを読み終った。

この間は眠気がさして来ると、手の甲にどことなくお灸をすえた。方々へすえるからその灸の痕が人の目について、先生はどうしたんだろうと皆が怪しんだ。これが、日本へ帰ってから、本当に漢文の意味を調べながら勉強した始めである。これによって、日本の歴史も始めてよく頭の中に這入った。外史を終えて「国史略」を読んだ。自分の漢学の素養はこれだけである。

四、契約と交渉について

おおよそ世の中というか文明社会では、「人と人との間の約束事は余程のことがない限り履行される」という前提と信用の上に成り立っている。日本で知られる、いわゆる「契り」は、精神的なウェイトが大きな概念だが、西欧でいう「契約」は、当事者間の具体的な権利・義務を交渉によって定め、それを双方が意思をもって履行する、ということである。高橋は、米国留学時に、自分自身の「身売り契約書」をよく読まずに署名して手痛い目にあっている。この体験を通して彼は西欧流の「契約」の意味を学習する。サインしてしまったら終わりなのである。しかし、そこからが彼らしい。自らに有利な情報を集め、条件交渉（闘争）をすることを学ぶ。

私も考えた。主人の家に帰らずに逃げ出したりすれば、事は一段と難しくなって、皆に迷惑をかける、それもそうだ、と、子供心に思うには、自分から出ようとすればこそ難しい。何でもウンと乱暴して、呆れ返らせ、向こうから暇をださせるようにしてやろうと、それから毎日ランプはよし、皿はよし、手当たり次第打ち壊してやった。ところが一向利き目がない。主人も細君もそれを見ながら怒りもしない。そればかりではなく、細君は却ってそんなに荒っぽいことをしてはいけぬと親切におしえてくれる、これには私も当惑した。

もちろんこんな事で簡単に契約破棄にはならない。しかし、13才の子供がこのように自分で考えて実行するところが面白い。解決は、同時期ニューヨークに留学していた先輩たちが日本の維新の声を聞いて急遽帰国することになり、途中サンフランシスコに寄ったところで助けを求め、実現する。そして本当の契約破棄の交渉をするのを横で見て学ぶ。契約当事者として、自らの運命がかかっているのだから、これは真剣な学習である。

当事者間の直接交渉では解決しないため、先輩たちは、まず間に入ってくれる公平で権威のある立場の人を探す。それをサンフランシスコの名誉領事のブルックス氏に依頼する。ここで交渉には「落としどころ」があることを学ぶ。

さて対決の結果はドウなったかというと、こちらからは、第一仙台

藩から高橋、鈴木の両名分としてヴァンリードに渡してある金の清算書を見せて貰いたい、第二には奴隷の契約を破棄して貰いたいということを申出でた。すると、ヴァンリードは、自分は金を受取っている。しかし高橋をブランウンの所へ三カ年期五十ドルの約束で売ったのは横浜から桑港までの渡航費五十ドルが立替えてあるためだといい抜けた。そこでブルークスが、間をとって、それじゃ清算は別としてヴァンリードの立替えた五十ドルはこれを返すこととし、同時に身売りの契約は破棄する、ということに採決されて、私はここに始めて天下晴れての自由の体となった。

さらに、後に6ヶ月間、仏典の研究を一緒にすることになる一條十次郎がつぎのような知恵を付ける。つまり、いくら民法に定める「契約の自由」といっても、そもそも法律(国法、憲法)違反の契約は無効である、という基本原則も学んだ。

向こうではお前を奴隷に買ったつもりでいる。南北戦争以来奴隷の売買は御法度になっているのに、向こうはその国禁を破っているのだから、こっちに言い分はいくらでもある。

後に、ペルーの銀山経営が失敗に終わった時、相手側の共同経営者キンタヘーレン氏との合弁契約を解消する交渉でみせた彼の日本人離れした手際よさや、日露戦争時に、英・米・欧において巨額の外債募集をする時にみせた優れた交渉能力は、彼が、この万国共通の概念である「契約」の意味を正しく体得していたからと言えよう。日露戦争後、戦勝に浮かれる日本に、借りた金は返さなければいけない、と政府に緊縮財政を迫り続けたのも、国の無形の財産である「信用」を重んじたからであった。国際社会では、履行されない(できない)可能性は、「リスク」として認識され、それは冷徹に金利に反映されるからである。

五、自活することについて

高橋是清は若くして自分で働いて自分の生活費を稼ぎ出している。英語の教師、芸者の箱屋、学術書や新聞の翻訳、役所の官僚 ― 形は変わっても、「何か仕事をして人の役に立つことをしなければならない」という基本に則って、常に独立自尊の精神を維持した。彼はこの精神をアメリカに学んでいる。勤労を尊ぶプロテスタントの思想であろう。随想録から引用する。

元来、米国人が金銭を尊ぶのは、私の見るところによれば、金銭それ自身を尊ぶというのではなく、かの民族特有の、極めて強い個人的独立心から来ているもののように思われる。この点に十分注意して貰いたい。彼等はいかなることがあっても、決して他の助力を仰がないという性格の国民である。自分は自分の腕をもって、あくまでも世に処して行くという考えの強いことは、日本の風習と、だいぶ異なっている。（中略）たとえ、親子の間柄でも、困るからといって、助けを求めるということは、非常な恥辱とされている。子が相当の年齢に達した以上は、全くの独立独歩、一厘半銭も親の厄介にはならず、自分の奮闘によって、自分の運命を開拓して行く。いかに親に財産があっても子は独立の人間として、一本立ちで社会に立たなくてはならぬということが、一般の風習となっている。

さらにその仕事について、彼らしい、しかし大切な真理を、その随想録の中で述べている。

子供の時から今まで、一貫して、どんなつまらない仕事を当てがわれた時にも、その仕事を本位として決して自分に重きを置かなかった。だから、世間に対し、人に対し、あるいは仕事に対しても、未だかつて一度も不平を抱いたことがない。

私も、今日までには、ずいぶんひどく困った境遇に陥ったことも一度や二度ならずあるのだが、しかも、『食うに困るから、どうか救けて下さい』と人に頼みに行った事は一度もない。いかなる場合でも、何か食うだけの仕事は必ず授かるものである。その授かった仕事は何であろうと、常にそれに満足して一生懸命にやるから、衣食は足りるのだ。

ところが、多くの人は、現在困っていながら『こんな仕事では駄目だ』とか、『あんな仕事が欲しい』とか言っているから、いよいよ困るような破目に落ちて行くのである。（中略）何か仕事が無ければ、到底独立してゆくことの出来ないものは、仕事を本位とするより外に仕方がないではないか。すべて己れを本位とすればこそ、不平も起こり失望も起こるのだ。

私は、いろいろな仕事の例のなかで、高橋が18才かそこらで唐津から東京にもどって末松謙澄に会い、その彼が師範学校かなにかに入学しようとしているのを止めさせ、二人でフルベッキのところにある英字新聞から面白そうな記事を翻訳して新聞社に売り歩く。それで二人で月50円の定収を得るようになる、という話が好きである。

そもそも末松には、彼が英語を教え、反対に高橋は末松から漢学を学ぶ、という「交換教授」の話から発展したのだが、末松謙澄は、そのお陰で日々新聞社の社員として採用され、実力をつけて社説を書くようになっていく。後に末松謙澄は伊藤博文の娘を娶り、外交官として渡英してケンブリッジ大に学び、政治家として大成する。また日露戦争の間、英国に渡って日本の立場をヨーロッパで説明し（アメリカでは金子堅太郎）、高橋の外債募集を側面から助ける。もしこの交換教授がなかったら、この人はどうなっていただろうか。学歴より実力が最終的にはものを言うことを本能的に理解していたのだろう。

六、宗教について

高橋是清は、養祖母の喜代が観音信仰を実践する姿を近くに見て育った。またキリスト教についても、早くからその教えに接する機会があった。

私は信心ということには、三つ四つの物心の付く頃から親しみを覚えてきた。これは祖母の感化があって、祖母は毎夜、私を床の中に入れて置いては、仏前に座って、木魚を叩きながら観音経を誦読され、それから家内安全、無事息災を称えるのが常であった。

そして七つ八つになると、祖母は毎月18日には、きっと私の手を引いて浅草の観音様へ参詣し、やはり安全息災と称えられた。だから信心というものは、神仏に向かって自分または一家の安全息災を祈るものだと思ったのが始まりである。

芝愛宕下の仙台藩邸から浅草の観音様までは、片道2里（8キロ）の道のりである。今、地下鉄で行けば何でもない距離だが、7つ8つの子供が徒歩で往復するのは結構大変であったろう。神仏を信仰することはそれ程大切なことだと教えられ、身体で理解したのであった。また、末息

子の利一は、是清がキリスト教や聖書に接した経緯を次のように書いている。

彼は仏教のみならず、キリスト教についても教理を学んだ。十四歳で渡米し奴隷に売られオークランドのブラウン家で彼が働いていた頃の話しである。その一家に彼とおおよそ同年輩の美しい令嬢があった。当時の是清は早熟型で身体も年齢の割合に大きかった。この令嬢はやさしい気性の少女で、遊び相手にもよい同年配の是清に諸事親切であって、奴隷の身である彼に同情を示した。彼女は庭で薪割りをしていた是清の側に来て、新約聖書を与え、「この小冊は貴方が困ったとき必ず良き助けとなりますから、身から離さぬように」と言い残した。これが是清がバイブルを手にした最初のものである。

それから2年後、彼は帰国して宣教師フルベッキから英語を学びながら聖書の講義を聞いた。18歳の頃放蕩の味を覚え、素行治まらずフルベッキ先生の門下を辞するに当り、彼は先生から一冊の新約聖書をいただいた。その際「必ず日に一度だけは聖書に目を通す様に」と言われた。

このフルベッキ先生の教えは終生守ったようである。そして人生の様々な困難にぶつかったとき、是清は、聖書の教えに導かれた、と言っている。

また仏教については、是清22才の時、せっかく大阪英語学校校長の職が決まったのを投げ出して、アメリカ留学時代から大学南校の教師まで一緒だった友人の一條十次郎と二人きりで番町の一軒家に引き籠もって仏書の研究に没頭した、と自伝にある。世間では高橋は気が狂ったと評したそうだ。一條はいったいどんな人だったのか、少し引用してみよう。

（一條は）元来、漢学の力のある人で、かつては老荘の学に熱中したが、私がフルベッキ先生にキリスト教の教義を聞くころには、彼もともに同席して熱心に聴講していた。もっとも私は信者になったが、彼は信者にまではならなかった。それがフランスに行って以来は、却って仏教の研究に傾き、帰朝以来は英語も出来、フランス語も上手であって、外務省では役立つ人として惜しまれていたのに、自ら求めて辞職し、番町の山本達雄君の邸の隣に引っ込んで、一切世間との交際を断ってしまった。

約半年間続いたこの一條との議論は、次第に仏教の趣旨について意見が合わなくなって、終止符が打たれる。私が感動するのは、この一銭にもならない形而上の研究やら宗教論争を、半年も時間をかけてやる情熱である。後に、高橋は「随想録」に信心についてこうまとめている。

長ずるに及んであるいは仏教を味わい、あるいは耶蘇教を究め、その他先哲の訓えもできるだけ研究してみた。しかし、その間には色々の疑問が起こって来た。その重なるものはまず、①人間の死後果たして霊魂は不滅であるかどうかということである。この疑問を解決するまでには、進んだり退いたり、これで良いと安心していても、何時しかまた、ぐらついて来る。そして古今の聖賢の説かれた言葉にも疑いを持ったりした。しかし、そうしている間に、私はこれらの聖賢の説いた道は、結局一つものだということが解って来た。みなこれは現世の苦難を救うために説かれたもので、道はただ一つだ、信ずべき、歩むべき道はただ一つだということを考えるようになって来た。そして今日においては霊魂の不滅を信じるようになってきた。

それからまた、②果たして神や仏というものが存在しているか否か

という疑問が湧いてきた。ある時は神仏の存在を肯定し、ある時はこれを否定する。そうして行きつ戻りつして、なかなか信じ切るまでには至らない。しかし畢竟するに、人間というものは弱いものである。人間以上のある偉大なる者によって、運命づけられているのであって、それ以上はどうにもならないということを知るようになった。それがつまり、神といい、仏と呼び、天と唱えるものである。

然らば、③肉体を離れた霊と神仏との関係は、どうであるかという疑問が次に浮かんだが、私はこれも人間個々の肉体を離れて、個々の霊が別個に存在するものではなくして、宇宙の大霊魂と合した一つのものだと思うようになった。

高橋是清の人格形成／人材育成に大きく影響したもの、端的に、彼の学習なり努力がどのような分野に注がれたのか、その代表的なものとして、今六つのエピソードを見た。この他にもちょっと考えてみると興味深い分野が幾つもある。例えば、⑦酒や放蕩、相場などの人生の失敗について、⑧若くして海外を見たことについて、⑨家族や親族について、⑩転職や出処進退について、⑪国家観について、等々。

高橋是清が主に学んだ江戸末期から明治期は、今の時代と違って世の中がダイナミックに変化をとげる時代であった。情報整理が得意であった高橋は多くの記録を残している。これらの分野についても必ずや興味深いエピソードが描けると思うが、ここらあたりで話を前に進めることにしたい。

これらのエピソードから言えること

さて、以上挙げた6例のエピソードから何が言えるだろうか。現代の教育、特に義務教育である小中学校の教育と、何がどう違うか。少し考えてみたい。

（い）まず言えることは、若いときから形而上の問題に真正面から取り組んでいる。生死の問題。精神の持ち方。宗教問題など。それに大変な時間と労力をかけている。「人間には義とか名誉とか、国家とか信仰とか、命より大切なものがある」という教育である。

（ろ）次に言えることは、学ぶ時は、集中的かつ短期間で、更に「本物の教材で」学んでいる。四書五経を素読する。辞書を丸写しにする。本物の短刀を渡されて切腹の手ほどきを受ける。ヘボン夫人やフルベッキなど超一流の人から直接英語を教わる。毎日バイブルを英語の原文で読む。日本外史を原文の漢文で、しかも三ヶ月で二十二巻を読み切る。仏書を六ヶ月かけて友人と議論しながら研究する。

（は）三つ目に、身体を使って学んでいる。或いは自分で自分を新境地に投げ出していく。墓場で無縁となった墓の苔を落し、草取りをする。毎朝3時に起きて、4キロ半の道程をお寺に通う。英語の師匠のところに辞書を読むために毎晩通い、手書きでこれを丸写しにする。英字新聞の記事を日本語訳にして新聞社に売り歩く。一杯やって眠いところを、手当たり次第手にお灸をすえて勉強する。このように、頭の中で観念的に考えているだけでなく、常に肉体的な「行動、実践 アクション」が伴っている。

（に）四つ目は、勉強する順序にこれといった決まりがない。また正式に資格を持った先生とか師匠等からだけ学んでいるのではない。相手構

わず、次々と出会う誰からでも学んでいる。祖母からは観音信仰を、お坊さんからは四書の教えを、突然突きつけられた「奴隷の境遇」という現実の厳しさからは、状況判断と交渉能力を。そして少参事の中沢健作からは日本外史と漢学を。特に「人との出会い」と「学習」がセットになっている点に注目したい。

（ほ）そして最後に、若くして自活し、自己責任で試行錯誤をしながら生きていくことの醍醐味を味わっている。人に騙されて借金を背負ってしまうこともあれば、放蕩の限りを尽くし、ついには芸者の箱持ちに成り下がるどん底も経験している。しかし安易に人の助けを求めていない。いつも自力で切り抜けている。いかなる境遇であっても、そこは人間対人間の問題であり、高橋是清は、小手先の才知ではなく、最後は「正直、信用、実力」が運命を切り開くことを学んでいる。そしてその一見バラバラに見える体験の上に、その後の彼の知識と知恵がさらにさらに組み立てられていく。

以上見てきたように、高橋是清の学習に関する内容や方法は、現在の文部省による「教育要綱」や「カリキュラム」が何歳の児童はどの教科をどこまでと画一杓子定規に（児童からみれば他動的に）推し進めるやり方と、根本的に異なっていたことを指摘したい。

高橋是清の教育論

高橋是清は25～6才の時、頼まれて廃校となっていた共立学校を再興し、校長になっている。これが後の東京開成中学校（現開成高等学校）である。明治13（1880）年に、是清は生徒達に訓示をしている。その中で次のような主旨（小説「赤と白」序より）の話をしている。

学問の道ははなはだ広いが、その目的は自身固有の能力を研磨発展する事にある。学ぶ者が良く注意観察するときは、事物は学問にならないことはない。その意味で世界は、大学校である。

自ら事物の是非得失を究めず、ひたすらに既にある知識にのっとることに努めるならば、学んだことは自らに関わらないものになってしまう。記憶力とともに思考力を用いる時は、各事物を一々推究するから、よく事理を弁明し、前人未発の道理をも発見するのである。

解き難きは質問することが必要であるが、教師は諸君の補導・案内者である。基本は自分で自分を教育することである。

ここで述べられていることは、

（ア）学ぶ目的は、自分自身に固有の、天から授かった能力（タレント）を伸ばし磨くことである。

（イ）対象の事物をよく注意観察することが学問の基本である。それは学校だけにあるものではなく、その気になれば世の中全てが学問の対象となる。

（ウ）既にある知識、即ち他人が導き出した結論、法則、真理などを学ぶだけでは、その知識は自分のものにならない。思考力を用い、因果関係を究明し、その意味をよく理解しようと努めていけば、未だ誰も到達したことのない真理にもたどり着くことが出来る。

（エ）解らないことは質問しても良いが、教師は案内者に過ぎない。自分で自分を教育するのが基本である。

２６才でこれだけの事を言い切れたのは、自分自身そう信じて、そのやり方でやって来て、自信を持っていたからであろう。おおよそ既成の学校カリキュラムを無難にこなしてきたというだけ、という人からは出てこない言葉である。

このような教育に関する成熟した考えに到達できた背景には、フルベッキなどの博学的知識をもった超一流のジェネラリストの影響があったであろうことは想像に難くない。なぜなら明治維新を成し遂げた綺羅星のような人材で、フルベッキの教育や影響を直接または間接に受けていないものは殆どいないといっても過言でないからである。しかし、同時に、彼らにはその影響を全身全霊をもって受け止め、自分の生き方に体現することができるだけの下地が備わっていたという点も見逃してはならない。それは、江戸時代の教育はどうであったかということにつきるが、この分析については後ほど議論することにしたい。

高橋是清が共立学校長として述べた、この成熟した教育原理に反して、明治政府は西欧の例にならって、近代化の名の下に、全国一律の義務教育制度を導入していった。それは富国強兵を急ぐため、中央集権化を進めて行かざるを得ない当時の帝国主義時代の要請であったことは間違いなく、外に方法があったかというと多分なかったであろう。しかしその全国一律、画一化していった教育の弊害が顕著になっていった大正末期から昭和のはじめに関して、高橋是清は、大正９（1920）年の文書「内外国策私見」の中で、文部省の廃止を訴えている。その時、彼が列挙した理由をここに見てみよう。

文部省ハ文教ニ關スル一切ノ事務ヲ統轄スル中心行政府ナリト雖モ一國ニ取リテ必スシモ必要缺ク可ラサル機關ニ非ス現ニ米國ノ如キ其機關ナク而シテ其國文教ナシト云フニ非ラサルナリ否我國ニハ之アルカ爲メ大局ノ打算上不利ナリト認ム可キ點少ナカラス

即チ今日文部省ノ尤モ重キヲ置クハ全國ノ普通教育ヲ統一監督指導スルノ點ニ在レトモ然モ普通教育ノ根幹タル小學教育ハ元來國民ノ處世上ニ必要ナル常識ノ基礎ヲ養成スルヲ以テ目的トナスカ故全國劃一的ニ一定ノ規矩準繩ヲ設ケ其地方ノ状況如何ヲモ顧ミス全國ノ子弟ヲ一齊ニ教育セントスルハ實ハ謬見ノ甚シキモノト云ハサル可ラス即チ大都會地ニ於ケルト山村僻邑ノ地ニ於ケルトハ四圍ノ環境全然異レリ故ニ子弟力普通教育ヲ了リテ後實際活動界ニ入ル其準備的教育ニモ多少異リタル素養ヲ必要ト爲スヤ論ヲ俟タサル所ナリ

例ヘハ田園ノ子弟ハ農桑ニ關スル趣味ノ涵養ト其素養ヲ必要トスヘク都會地ノ子弟ハ手工又ハ商業ノ初歩ヲ必要トスルカ如シ要スルニ普通教育ハ全國各地ノ民度及ヒ経濟上ノ情勢等ニ由リテ夫レ夫レ其地方ニ適當セル教育ノ方針ヲ採ルヘキモノニシテ全國劃一的ニ之ヲ施スヘキモノニ非ス況ンヤ都市ト町村トハ各々其經濟財政ノ状態ヲ異ニスルニ拘ラス一定ノ年齢ニ達セル子弟ハ必ス六年又ハ八年ト年限ヲ定メテ全國ニ渡リテ何等ノ例外ナク之ヲ強制セント欲スルカ故地方小村落ニ於テハ今日教育費ノ爲メニ非常ナル苦痛ヲ感シツツアルモノ極メテ多キニ於テヲヤ是レ餘リニ形式ニ捕ヘラレ民度ノ如何ヲ顧ミスシテ劃一教育ヲ強制スルノ結果ニシテ教育費ハ町村ヲ疲弊困憊ニ導キツツアルモノト云フモ決シテ過言ニアラサルナリ而シテ斯クノ如ク全國平等劃一的ノ教育ヲ施ス其結果ハ青年子弟ヲシテ動モスレハ實際ヲ離レタル平等思想ニ陥ラシメ社界ノ秩序上下ノ差別等ヲ一切無視スルノ感念ヲ懷カシムルニ至ル傾向ナシト云フ可ラ

ス

左レハ小中學ノ施設經營監督ハ總テ之ヲ府縣町村等ノ地方自治體ニ委シ各地ノ地理歴史人情風俗經濟状態ニ適應シテ適宜ニ之ヲ施サシムルヲ以テ尤モ妥當ナリト云ハサルヲ得ス

ここで高橋が言わんとしていることは：

（オ）文部省は国にとって必ずしも必要な機関ではない。米国には文部省は無いが、だからといって文教がないわけではない。わが国ではこれがあるため、却って大局的に不利な状況がでてきている。

（カ）全国一律の義務教育は、地域やそれぞれ異なる子供達の個別ニーズと合致しない。

（キ）こうした教育を受けても、経済的自立や自活につながらない。場合によっては貴重な労働力を地方から奪う結果になる。（より深刻なのは、本来自主的に興味を持って学習する貴重な時間を、子供たちから奪い、勉強嫌いにしてしまう。）

（ク）悪平等主義の思想を蔓延させ、社会の秩序や実業の世界の実体に合わない人間をつくりだしてしまう。

（ケ）全国一律の義務教育を維持するために地方財政が圧迫される。

（コ）従って、教育に関する権限を地方に移譲して、それぞれの地域の地理、歴史、人情、風俗、経済に適応した教育をするべきである。

大正9年、原内閣時に書かれた「内外国策私見」の文書は、その刺激的な参謀本部廃止論の方が主に話題となったため、この文部省廃止論はあまり注目されなかった。しかし私は、何世紀にもわたって国の有り様を決めてしまう教育の根本問題を扱ったこの主張は、より大切な内容を含んでいると思う。

高橋是清は、こうした明治以降の画一的な教育をする学校の頂点にたつ専門学校や大学校、さらに陸軍・海軍の大学校（士官学校）の卒業生たちが、実は国を誤る最大の原因となってきていることを喝破していた。ジェネラリストとしてバランス感覚の研ぎ澄まされた明治の元勲たちが次々と亡くなり、または老齢のために影響力を失っていった昭和初期の政治の場において、彼は一人で戦わざるを得ないところに追い込まれていった。

今ここにその端的な例として、**井上準之助**と**荒木貞夫**を挙げてみたい。どちらもいわゆる高橋是清が行かなかった学校（制度）の優等生であった。そのどちらもが、日本を不幸への道に引きずり込んでしまった、いわゆる秀才だった。

井上準之助はライオン宰相とよばれた浜口内閣で蔵相となり、旧平価での金本位制復活を断行して、日本を「昭和恐慌」のどん底に引きずり込んだ。それを引き継いだ犬養内閣で蔵相を引き受けた高橋は、早速に金輸出の再禁止をし、平価の切り下げを行ってデフレ経済を終息させ、積極財政をもって世界でも類を見ない早期の不況脱出を実現した。当時の中外商業新報は、この井上と高橋の違いを評して、次のようなコメントを社説に掲載した。

井上は金融・為替のみを見、また国民経済の「屋台骨」である金融資本＝財閥の強大化のみに心がけたが、高橋は社会経済の全般を視野におさめつつ、国民経済の本当の「土台」である産業や国民大衆の利益を重視したのである。井上の政敵ともいうべき政友会の三土忠造は、

「井上は銀行の窓口からのみ経済を見ている」と評していた。当たらずとも遠からずの指摘である。

更に、中村隆英氏はその名著「昭和恐慌と経済政策」のエピローグで、二人の違いについて次のような評価をしている。

井上の財政政策は古典派経済学の模範答案のようなものであった。むろん現実には救済資金を放出したり、財政の赤字を補うために公債を発行したりはしたけれども、大勢としては講義ノートをよく整理してあるが自己の意見はほとんど付け加えられていない模範解答のような政策を井上は実施したのである。

これに対して高橋は、金融政策の意味をそれほど強くは見ていなかった。むしろ高橋にとっては産業の発展の重要性あるいは国民の所得水準の維持、向上という目標が強く意識され、金融や財政はそのために協力すべきものであるという考え方を強く持っていたようである。その考え方は金再禁止後の井上への答弁にも表れている。

荒木貞夫は、そもそも陸軍大学校を首席で卒業した秀才で、皇道派の重鎮といわれた人であった。高橋は、犬養内閣と齋藤内閣の大蔵大臣であったので、荒木陸軍大臣とは、国の予算編成をめぐって日々対立した仲となる。

特に満州事変以後、軍部の要求する軍事費は逐年増大し、またその予算折衝の態度もだんだん強硬となっていった。高橋は、軍部の侵略的な行動に対しては、とりわけそれが英米中三カ国と日本との関係を脅かすものであれば、一貫して反対した。荒木陸相との対決は次第に深刻化していったが、次のような歯に衣着せぬ発言をもって軍部を押さえ込もうとした。

軍事予算の膨張はいたずらに外国の警戒心を刺激し、外交工作の機会を少なくするばかりでなく、予算内容の国防偏頗が国民経済の均衡を破ることになる。

陸軍なんて予算をやると、すぐ戦争をするからな。

そして極めつけは岡田内閣のときである。執拗に増額要求する陸軍に対して、高橋は世界地図を持って閣議に臨み、その要求を押さえ込もうとした。

ただ国防のみに専念して悪性インフレを引き起こしその信用を破壊するごときことがあっては、国防も決して安固とはなり得ない。

国防というものは、攻め込まれないように守るに足るだけで好いのだ。だいたい軍部は常識に欠けている。（陸軍幼年学校のように）社会と隔離した特殊の教育をするということは、不具者をつくることだ。陸軍ではこの教育を受けたものが嫡流とされ幹部になるのだから、常識を欠くことは当然で、その常識を欠いた幹部が政治にまで嘴（くちばし）をいれるというのは言語道断、国家の災いというべきである。

こうした痛烈な軍部批判発言が新聞で報じられたことが、二・二六事件で高橋蔵相の惨殺につながったことは間違いない。それは起こるべくして起こった悲劇であった。

スメサースト氏が「高橋は、若いときには満足に学校にも行けなかったにもかかわらず、生涯最後の25年間に政府の要職を占めるまでの間に、高い教養を身につけ、さらに、正規教育につきものの視野狭窄にも陥らないものの見方ができる人物になっていたのである」と書いた時、恐らくこの昭和期に入って次第に政治の舞台に台頭してきた、「広く全体を視野に入れて判断することの出来ない」これら若手の官僚や軍人たちのこと

が、念頭にあったのではないだろうか。

この章の最後に、高橋是清の秘書官であった久保文蔵氏が昭和28年1月号の雑誌「財政」に書いた文章の一部を紹介したい。

〈日常の勉強ぶり〉

高橋さんは非常な勉強家で、死の直前まで寸刻を惜しむような塩梅で勉強して居られたのである。死の直前に愛読されていた本はシドニー・ウェッブ夫妻の著した「コンミュニズム」上下二巻の原書であったが、官邸の大臣室で、三省堂のコンサイス・ディクショナリイを片手に読みふけっていた様子は今でも目先にちらつくのである。ロンドン・タイムズとニューヨーク・タイムズは毎日見て居り、世界の刻々の情勢の変化には特に心を配っていた様である。シドニー・ウェッブの前記の書物もロンドン・タイムズの広告から特に頼んで輸入したもので、日本で一番初めにこの書物を見た者は、恐らく高橋さんだったと思う。

高橋さんの勉強振りについては、『主人は若いときから正規の学校教育を受けないので、友人同僚の様に学校を出たのとはちがい、俺は卒業期のない一生をかけての勉強をしなければならぬと言って若い頃は▪燭の▪を手の甲に垂らして、眠気を醒しながらやられました』と高橋さんの奥さんに聞いたことがある。

このようなわけで平素の広い勉強が閣議の際にも物を言ったようで、当時の書記官長白根竹助氏は私に『兎にかく一番正確で広い知識と高い見識を持っている点で、閣内に高橋さんに及ぶものがない。だからどんな問題が出ても結局高橋さんの意見が閣議を「リード」してしまうのだ』と言っていたのを記憶している。

〈白い手の農村陳情団〉

私（久保）は、農村陳情団は自分で適当に処理していたが、軍部辺りの空気が色々と新聞にでるものだから、ある日、高橋さんに「農村の陳情団にも会って頂けますか」と聞いたのである。

高橋さんは、「会ってもいいけれど、君は陳情で押掛けてくる多くの人達の手を見ているか、手の白い百姓が多いんじゃないかね。自分は本当に鍬、鋤を取る百姓には喜んで会いたいが、手の白い百姓に大蔵大臣がいろいろ会う必要もなし時間もないから、お前が然るべく聞いてくれ」と言われたので、その後、これら陳情者の手で判断して白い手の百姓は自分が裁き、鍬、鋤をとる百姓は大臣室に入れて、高橋さんと時間かまわず話し合う機会を作る事にしていた。このような場合、高橋さんは地方農村の有様を細々と耳傾けて聞くのを常とした。

〈給仕のしつけにも親心〉

高橋さんの若い頃は、随分やかましい「雷親父」であったらしいが、私の仕えた晩年頃は非常に円熟しておられ、酸いも甘いも噛み分けた情愛の深い人であった。当時官邸に十五、六の男の給仕がいた。来客の場合、お茶を出すのに、主人の高橋さんに先にお茶を出したことがあり、そんな事が二、三度あったのであるが、高橋さんはある日私を呼んで「お前は給仕の教育に気を配っていないから、お茶の出し方も知らぬではないか。お茶の出し方一つも教えてやらぬ様なそんな情味のないことでどうする。給仕の親の身になって親切に導いてやらねばならぬ。自分も十三か四のときカリフォルニアに行ったが、丁度あの給仕位の年頃だったと思う。万里異郷の地域で優しい言葉をかけられた時の気持ちは、今でも忘れられない。人の情というもの程有難く感

ずるものはない。君も秘書官として多忙とは思うが我が子の様な気持ちであの給仕達を立派に育ててやらねばいけない。」と諄々と説く高橋さんの目は、心なしか潤んでいたようでもあった。

明治以前の教育はどう違ったのか

岡崎久彦著「陸奥宗光とその時代」の冒頭のところに江戸時代について次のような記述がある。

江戸時代というと、現代の人は明治維新で近代化する前の暗い封建的な時代のイメージを抱きがちである。しかし、明治時代のほんの二十五年前、文化、文政、天保（1804・1843）の時代は江戸文化の最後の華であり、歌舞伎、浮世絵など日本文化として今に残るものは、ほとんどこの時代に完成されたと言って過言でない。それはまた、人類の政治社会が近代化の荒波に呑み込まれる前に到達した文化の極地として、世界中の文明社会の十八世紀文化と共通するものであった。

東洋の歴史上、文治政策がもっとも発達したのは、おそらく、紀元一世紀および二世紀の後漢時代の二百年と、徳川の二百五十年であろう。

『三国志』の面白さは、出てくる英雄豪傑が皆一流の知識人であり、その言動にそれぞれ深みがあるからであるが、明治維新の面白さもこれと同じであろう。ヨーロッパではペリクレスの盛時に教育を受けた人たちが活躍するトゥキディデスの『戦史』の時代がそうであったのだろう。『三国志』や明治維新の歴史を読むとき、読む人は、われわれの世代よりもレベルが一段高い教養人たちがかかわりあった歴史として、襟を正して読むべきであろう。

明治の人は偉かったと言われることが多い。しかし、伊藤、陸奥をはじめ日本の近代化を担った人々は江戸時代の教育を受けた人たちである。さらに厳しく言えば、日本を滅ぼした第二次大戦時の指導者たちはすべて明治に生まれ育った人々であったのも事実である。江戸時代の教育、とくにエリートの教育水準の高さは再評価されるべきであろう。

高橋是清は、維新から遡って14年前の安政元年に生まれた。出生と共に、仙台藩の足軽・高橋覚治是忠のもとに里子に出され、そこの養子となったことで和喜次（のちの是清）は教育の面では大変恵まれた。仙台藩留守居役・教育係であった大童信大夫の目にとまり、大崎の寿昌寺にあずけられたり、横浜に英語の勉強に送り込まれたり、さらには藩から公費で米国へ留学に出してもらえたからである。自伝の冒頭にあるように、もし高橋家にではなく、菓子屋の養子となっていたら、正にその人生は全く異なったものとなっていたに違いない。

そもそも高橋覚治是忠と妻ふみは4人の子供を夭逝または死産させていたことから、和喜次を養子に貰い受けたのであった。その後二人に実子の是利が生まれ、次第に養子の和喜次より実子の是利の方に両親の目がいくようになっていったのは、自然な成り行きだったのであろう。そこで、和喜次の教育は、祖母喜代の役割となった。この喜代の和喜次の教育に対する並ならぬ情熱が光るが、何故この血のつながりのない孫の将来に、これほど期待をかけ、その育成に一生懸命になったのであろうか。

実はそこに江戸時代に発達した武士階級の家父長的な家族制度で

ある「家督相続」の慣わしがあった。この制度は日本国憲法の制定に合わせて1947年に民法が大規模に改正され、親族編と相続編が根本的に変更されて廃止されるまで続いた制度である。武士の相続は家名と家禄を継ぐことを意味し、相続するのはあらかじめ届けてある嫡子が原則であった。これはまた被相続人の死亡日時に相続人となるべき実子がいない場合は、御家断絶を意味した。従ってその場合、養子を迎えなければならない。養子は親族の中から選ぶのが原則で、さらに御家人の養子は御家人の家から、旗本の養子は旗本の家から迎えなければならなかった。幕末のころになるとこの原則を破り、持参金目当てに町人を養子にする武士が多くいた。武士の窮乏が極まった結果であった。

苗字帯刀が許された足軽の高橋家も、是清の代以前に、二代続けて夫婦養子で家督をつないできた経緯があった。夫婦養子ということは、そもそも血のつながりが無い。それでも御家断絶を避けるために、養子縁組で家をつないでいかなければならない。現代から見ると、なんとも理不尽だが、この制度があったお陰で、和喜次は非常に高いレベルの教育を受ける機会が与えられた。喜代刀自が孫を可愛がって、その教育に熱心であったのも、純粋な人間愛だけでなく、「家」の維持と発展を心から願わずにはいられない、当時の制度があったのも事実である。今私はこの制度を復活すべきとは思わないが、この制度を廃止して失ったものはなにかをよく考えてみるべきであろう。

次に注目したいのは、江戸時代に全国的に広がった「寺子屋」とか「私塾」とか「藩校」という教育機関の役割というか機能である。これが、今の学校制度と次の点で大きく異なっていたのではないか。それは産業革命以降に、全世界的に広まった「義務教育制度」 ― スメサースト氏も指摘しているが、日本でも明治政府は、それまでの全国バラバラで意思疎通が難しかった日本語を「国語」という標準語に統一して、共通の義務教育を全国の子供達に例外なく課すことによって「日本人」を創出した ― という近代教育制度に、対比した形で列挙してみたい。

一、江戸時代の寺子屋や私塾の教育は、国が定める全国共通、統一の校則や教科カリキュラムなどの「一定の枠」があるわけではなく、それぞれのお寺の和尚や塾長の個性とか思想とか、得意とする分野の技能や知識を広めようというかたちで発展した、地域に密着した教育機関であった。

二、入学(塾)の門戸は広く開かれており、武士、僧侶、商人、農民、さらに浪人のこどもまで、およそ読み書きを学ぼうとするもの誰にでも、学ぶ機会が与えられた。また、男女の区別や年齢の制約も非常に緩いものであった。学びたいものが、同列に並んで一緒に勉強する場であった。また年長者や出来のよい者が、自然と先輩になって、後から入って来る生徒の指導にあたった。学ぶのは「義務」でなく、本人の「希望と意思」であった。

三、入学の基準も緩かったが、卒業の免状だとか成績などが、後に社会に出てから昨今の「学歴」のような意味を持たなかった。競われたのは実力であり評判であり、それは他の塾や流派との他流試合や、本来の仕事の場であった。商人や農民でも読み書きそろばんができることによって、新しい商売ができるようになったり、仕事に優れた技術を導入することができた。そうした実利に直結していたことが、子供たちを塾にいかせよう、という自然なインセンティブになっていた。

四、幕末には、単なる読み書きそろばんから、蘭学、英学、兵学、医学、

政治など、多様な学問の中から、専門性をうちだす私塾がでてきた。シーボルトの鳴滝塾、吉田松陰の松下村塾、緒方洪庵の適塾、大塩平八郎の洗心洞塾、そしてフルベッキが在籍した長崎英語伝習所。勝海舟の建言による海軍操練所。これらの塾から、湯水のように有能な人材が輩出された。そしてその裏には、塾の評判を聞いて、全国から優秀な若者が集まって競うように勉強し、それが明治維新を成し遂げる原動力となっていった。高橋是清が、肥前の唐津藩から１００円の月給が支払われて(つい最近まで殿様であった知事自身の月給が３０円であった)始めた英学寮の「耐恒寮」も、辰野金吾、天野為之、曽禰達蔵など、短期間に多くの後の人材を輩出している。

五、この他にも、剣術、柔術、馬術、茶道、華道、陶芸、歌舞伎、文楽、和算、醸造、天文暦学、地理学、出版など、それぞれの分野で弟子をとって、技能や知識を伝授するシステムが社会に組み込まれていた。どれも先天的で偶然の個人の能力に頼るのではなく、後天的な学習によって、人を育てるという「教育」の場であった。

現代人は、人と同じでないことを悩み、不平をもつ。それに対して江戸三百諸侯は、民に、他藩と同じ事を求めていられなかった。なぜなら気候風土の違いから、それぞれの土地の生産性がすべて異なったからである。幕府に毎年石高に見合った年貢を納めるにしても、米で納められるところはよいとして、米のとれない地方は、別の収入源を考え出さなければならない。漁業、林業、畑作、天蚕、それぞれの加工物、それこそその地方に合ったもので換金性があればなんでも良かった。『岩倉使節団と米欧回覧実記小論集』の小野博正氏による「大隈重信と佐賀藩」に良い例が載っている。

外国からの軍艦購入や製鉄材料輸入に充てる資金として米に加えて特産品の有田焼、伊万里焼、白蝋、石炭、和紙、小麦、煙草、木綿、鉄、硫黄、大理石など換金作物を奨励して国内外に輸出して蓄財し、幕末には公称三十五万石の佐賀藩は、実質九十万石の実力だった。

江戸時代は、藩主からして人と同じ事(人まね)をやっていたら藩の経営が立ち行かなくなって責任問題になった。民の不満が爆発して一揆でも起きようものなら、即刻に国替えとなったり、領地を没収されたりする運命にあった。さらにその施政に落ち度があれば、文字通り腹を切らされた。従って、江戸時代は、優れて地方分権と自治が行き渡っていた時代であったと言って間違いない。そして、それぞれが他藩とは何か違う個性・アイデンティティを持とうと努めた、実に「多様性」に富んだ時代であったのである。

結語

今回は、教育者・高橋是清の話に的を絞った。祖父のことを知れば知るほど、彼が育ち学び活躍した江戸末期から明治にかけての日本が、なんと精神的におおらかで豊な時代だったのだろうと思うと同時に、私の育った家には、その残影というか余慶のようなものが色濃く残っていた記憶がある。出来ればその「心象」を手がかりに、幾分かでもそのおおらかな時代を、現代にたぐり寄せてみたい、との思いで話を準備した。

準備をしながら、「高橋是清、生涯学び続けた実践の人」のタイトル

が、この世に生を受けたすべての人に等しく課された人生不変の課題を示していることに気づいた。「学び」そして「知る」というプロセスは「実践」なくして成り立たない。また「知識を求める」その行為そのものが、「人の生きる」ことの証であり、したがって「生涯学び続ける」、ということなのだろう。手の白い農業陳情団には高橋大臣は会わなかった。何故か、今一度考えてみるべきであろう。

結語（番外編）

近代化の舟に乗り遅れまいとして導入した明治以降の日本の教育制度には大きな欠陥がある。二・二六事件で惨殺された渡辺錠太郎、齋藤実、高橋是清（そして一命をとりとめた鈴木貫太郎）などの良心の軍人や政治家たちは、この近代教育の犠牲者であった、という図式も成り立つのである。

現代社会に多く見られる、いじめや引きこもりや自殺の問題も、その根っこのところに「個性を認めない、多様性を否定する、画一的な近代教育」の問題が横たわっている。

「あの人変わっている」の一言で、個を否定したり、疎外したりする。「誰々は何年入社」、「出身校はどこどこ」ということで、人をグループ化し、内と外に分類する。気づかないところで、私たちの頭はこうした「非情」な構造になってしまっている。

規格化、標準化、統一化など、本来工業製品に当てはめるべき基準を、人の評価、育成に当てはめて、個性とか創造性を認めない、或いは知らず否定する、そんな教育をし続けている。この基準をもってすると、九割以上の人はどこかで拒絶され、否定され、疎外されたと感じ、その結果、自信と意欲を失う。なぜなら最大公約数は、その条件を満足する解となるべき数字は、必然的に非常に小さいものだからである。

私たちが歴史を学ぶとき、それは結果的に「現在」を論ずることにならざるを得ない。歴史上の人物である高橋是清から学ぶもの、学べるものは、数限りなくある。しかし、その高橋是清本人がどう学んだか、どうして学べたのかは、より大切な視点であることを指摘して話を終えることにしたい。